

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	短詩：文苑
Author(s)	ろーず; ばいたれっと; さふらん; 鮎川, 孤舟; 孤月
Citation	龍南會雜誌, 85: 76-80
Issue date	1901-06-03
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/5137
Right	

誠をこめて讚美の歌をあげよ。
心のたくより奉賀せよ、

世界平和の君たるべき、
我が王子の降誕し玉ひたれば。

七十六

短詩

花たば

るーす

花ちらばその花びらに歌あらん茶屋の娘の拾七の春

春の海の戀の泡だつ青潮にたけの黒髪ときまぐる少女

花びらの散りしく庭を聲もせで小蟻はひゆく春の夕暮

物れもふ我袖とりて口にあて、面わ見あぐる君にもあるかな

花の下に老いしあそび女三味だきてあまりに糸のさびしとなきぬ

わか草のいぶきにたへぬ我胸を細きかひなに撫でますな君

風ふけば緋桃花ちる友が家の書院のうち茗茶煮る夕

こびしらに散りくる花を手をうけて口つけんにはあまり冷たき

庭の面のひともと椿花ちりてゑあさる雀にげまどひつ、

ばいたれつと

君植ゑし白桃の花咲きたりと紅筆細き妹が文

さめざめと只泣く君のかひなとりてなせにとさ、やく花の下影

マーブルの古き御手洗苔むして櫻ちりうく春雨の夕
すわてく南の縁に袖をかむ肩あげ落ちし十六の春

戀もすて名もすて、さて羊牧の群に入らばや入らばや群に

行く春に怨はありや悔ありや胸をいだきて泣ける少女よ

宿かれば主の翁眉あげて一夜戀とく春雨の夜を

窓に近く少女機織る布の上に桃の花ちる春の夕暮

さふらん

軒端たつ鳩の羽風に白桃の桃の花ちる春の夕暮

白き羽の胡蝶とまれるすみれなに戀したりやわかいとし妹

新墓のそのおくつきにはらくと櫻散るなり春の夕ぐれ

白桃の桃の花ちる夕ぐれを妹よひかずや琴のひとふし

散る花に庭の若松かをりして折りてかぎしよ春の曉

つらしとわ君を見しよりものしりぬ戀するものとなを生れけむ

世の中のそしりにたゑす山に入り春の日つむよ谷のすみれを

白梅のかの二ひらは筥の中にむかしの香ありやあらずや

その夕たゑぬ思ひをつけしとき戀はめぐらと君はなきしよ

いつまでも小供心にありねよと言いしは姉君のいまわの教

紅桃は君にふさわすさらばとて一日を山に白桃さがす

今日もまた鶯追いて知らずく白梅多き谷に入るかな

春の日は海のかなたにくれゆきてたくつきごころ桃の花ちる

花籠をさげて乙女がたどりゆく小川のほとり百合多く咲く

春を追うて不夜の城跡ともらねば風あくちろう玉椿かな

立 春

鮎川孤舟

遠近の尾の上の雪は消えなくに

いづこを越へて春は來ぬらん

旅 中 春

春風の吹き來るたびに思ふかな

わが故郷の花はいかにと

小 田 蛙

をぼる夜に里田の小路分け行けば

かすみの奥に蛙なくなり

落花流水

谷川にちりにし花の流れつゝ

よとむかたにや春は行らん

人に梅花を送るとて

ちりはてと捨てらるとも梅の花
香をだにのこせ人の袂に

名所松

昨日見しにじの松原かすみけり
たきより春の來し心地して

遠霞

うすぐみを横に一筆遠がすみ
かきつらねたる四方の山々

水面櫻

こころなきひと計りかは櫻花
ねたしや浪も折らんとすらん

すがる

此たきの清き姿はちはやふる
かみよながらのながめなるらん

蝶

物言はぬ仲とは見えず蝶二つ
ねくれ先だつ春の道のべ

送友人某之渡臺

錦きて相見む後のたのしさに

孤

月

つらき別をしのぶけふかな
ふる里を遠くいでたつ吾友の
ゆくての船路なみ静なれ

漢文

溪耶馬記勝

山田濟齋

凡景勝之境文人鼓筆稱揚往々過實余少讀頼子成耶馬溪圖卷記希一寓目以驗之久矣已亥秋客東肥歲晚少閑與友人兒島子文落合士應往遊溪山之奇出意料之外始知子成不吾欺也乃拾其遺爲記勝七篇

朝陽橋

庚子元旦自筑入豐薄暮投守實驛終夜聽溪聲喧耳翌早發得朝陽橋橋下即耶馬溪子成所謂一水北來蓋發源彥山者是也憑欄俯瞰怪石膠礪奔流飛激碎而沸白匯而湛碧巒影搖動仰則石壁數十仞嶄然睨水而立遠而彥山受朝陽雪色爛々射下界近而連峰夾水腴者婉妍瘦者露骨爲岑爲嶠爲巘嶂與水紆廻望之如屏既而獲筍巖

筍巖

馬溪之水經朝陽橋下折而東田塍稍開民戶點綴水與山漸將平遠路左見怪巖大而高者三其中腹折爲空洞廣容百人其一岌然拔地頭尖指天其一偃塞如巨人蟠踞小者